



# 三浦学苑

## 素材よりも、どう育つか 持てる力を最大限に発揮する

MURA GAKUEN HIGH SCHOOL

高校野球は実質2年半もない。あれもこれもと欲張ったら、時間が足りない。まず武器をひとつ確立し、そこから駆け引きの道具を増やしていければ、勝負の土俵に立てる。三浦学苑は選手個人もチーム全体も、順序だてて強くなっているように感じられる。

文芸春秋 久保弘毅

### 新たな歴史を刻んだ代

昨秋は55年ぶりとなる県ベスト4進出。日大藤沢、平塚学園、立花学園に勝つての4強入りが評価され、センバツの21世紀枠の県推薦校にも選ばれた。今年2月には佐原グラウンドの改修工事が完了し、全面人工芝となった。6月27日には完成式典が行われ、3年生による紅白戦で新たなスタートを切った。



今年の3年生は選手24名とマネージャー2名

ギューラーになる逆転人生は大いにあります。ウチみたいなチームが戦えるから、見ている人も面白いだろうし、それがアマチュア野球の良さだと思っています」  
これから先、近い将来に三浦学苑が甲子園に行けるようになったとしても、榎平監督は方針を変えるつもりはない。  
「いい選手がいる、いないではなく、どう育つかですよ」  
育成の面では「三浦学苑は右の好投手がよく育つ」と言われるようになった。榎平監督の就任当初にいた秋元秀明(元J.R.東海)をはじめ、石井涼(富士大)、昨夏に横浜を

相手に好投した渡邊倫太郎(桐蔭横浜大)など140キロを超す本格派が毎年のように出てくる。明確な武器がひとつあれば、戦い方を決めやすいし、相手も警戒してくれる。今年も長谷川が先輩たちに続くだろう。2年生には、秋の平塚学園戦で完封した上村海斗もいる。  
夏の代替大会に向けては、3年生24名を中心に戦いたいと、榎平監督は考えている。  
「ベンチ入りの25名に入ってよかったねではなく、一人ひとりがどうやって高校野球を完結させるか。そこまで考えてやっていきたい。チームがひとつにまとまる中で、

55年ぶりの県4強にグラウンド改修。今年の3年生は、三浦学苑硬式野球部の新たな歴史をつくった代といっている。それだけに、春と夏に公式戦を戦いたかったのが本音だろう。榎平剛監督は言う。  
「グラウンドの改修で、11月からの4カ月間は野球らしいことができていなくて、3月からやるぞと思ったら新型コロナウィルスで活動自粛。半年以上野球ができませんでした」  
各自の自覚に任せる状況が続いたのち、6月13日からようやく練習が再開し、代替大会に挑む。

### 自分の強みで攻めた秋

今年の代は傑出した選手はいないものの、バランスがいい。エースの長谷川翔はコントロールに自信があり、特にベースの一塁側への制球力が素晴らしい。1年夏からマスクを被るキャプテンの立川太一は「右打者のアウトローは投球の原点だし、左打者へのインローは長谷川の一歩いいボール」と言い、昨秋は一塁側のボールでひたすら勝負した。榎平監督も「まだ完成していない秋に10を求めても無理。秋の時点で持っている8を100%出せるように」と、バッテリを後押しした。



1年夏からマスクを被るキャプテンの立川



練習では個別で課題に取り組む時間もありつつ、結束を高めるために全学年が一緒にやるメニューも入る

野球の醍醐味、難しさは変えずに、最後までやってよかったと思える大会にしたいですね」  
普段の練習でも、1年生から3年生まで全員が同じメニューに取り組む時間を意識してきた。歴史をつくった代の最後の大事な仕事。3年生の示す姿が、三浦学苑のこれからにつながる。

自分たちの強みで勝負した秋。右の強打者が多い立花学園戦では、3対0の完封勝利。相手を上回ることができた。しかし桐光学園との準決勝では、左打者にインコースを打たれて、ワールド負けを喫した。立川は「中盤に塩崎拓哉の本塁打でこっこの流れになったのに、最後は頭が真っ白になって、長谷川を助けられなかった」と悔やむ。桐光学園の左打者は体を上手に逃がしながら、インローをさばく。ワンランク上の技術を持った打者への対応に課題が残った。

榎平監督は「ベスト4まで行って初めて見たものもある」と言い、秋の戦いをベースに、レベルアップに努めてきた。勝負の軸となる武器はある。あとは駆け引きの道具をどう増やしていけるか。長谷川と立川はともに「緩急に磨きをかけている」と話す。あれもこれもと欲張らずに、段階を追って強くなるうとしていくところが頼もしい。



榎平監督は日大藤沢、日大国際関係学部で主将。昨秋は母校の日大藤沢に初勝利を取めた

「やっぱり経験は大事なんです。主力の十数名とあとは手伝いではなく、全員の可能性を伸ばしてあげたい。みんなに野球をやらせてあげる時期が必ずあるはずですよ。高校で控えたとしても、大学でレ

### どう育つかが肝心

野手に目を移すと、清水翔太と阿部朝陽の二遊間は安定している。7番の塩崎が昨秋だけで2桁本塁打を放つなど、簡単に凡退しない打者を



長谷川 翔 (3年/右投右打/投手)

### 自信のついたスライダーを武器に悔いのない夏にする

プレートの三塁側を踏んで、ホームベースの一塁側に投げるのが、僕が一番得意なコースです。この球筋は普段のブルペンから意識しています。

カウントが悪くなった時でも、変化球でストライクが取れます。僕は球威よりもコントロールのタイプなので、変化球ではスライダーに自信があります。スライダークジーンギリギリを狙って、スライダーを決めたいですね。冬からずっとグラウンドが使えなかったで、その間は下半身とリリースを意識して体づくりをしてきました。体幹も強化して、体重も増やしています。

6月から練習が再開して、練習試合でも調子がいいです。夏は暑いから球数をなるべく少なくするよう意識しています。野手のことも考えて、四死球を減らして、テンポよくアウトが取れるよう心掛けています。

### Pickup Player

球数を減らすための工夫は、ボール1個分の制球力ですかね。たとえば0ボール2ストライクに追い込んだら、右打者の外ギリギリを打たせて、ファーストゴロやセカンドゴロで簡単に打ち取る。そういった組み立てができるようになりたい。

(昨秋に得意のインコースを打たれた)左打者には、イン以外を上手く使いながら、タイミングを外していきたいです。高低を使ったり、間を変えてみたり。走者がいる時のセットポジションでも早く投げるなど、タイミングを外す工夫をしています。

キャッチャーの立川とは「どんな強打者にもビビることなく、緩急を使っていこう」と話しています。同じスライダーのサインにも、自分で緩急をつけてみたりしています。スライダーはここにも曲がりがあるので、スピードも上がったので、自信がつきました。

最後の大会は、悔いを残さないピッチングをしたいです。